

Culture



し び の 一 と

高松市美術館
ポランディア通信
2002年4月1日発行

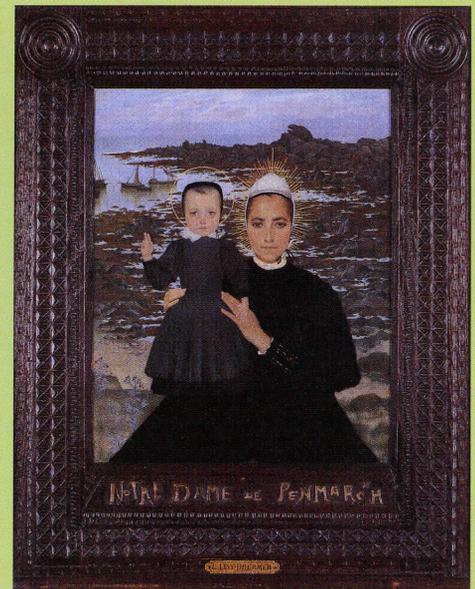


ポール・セリュジエ《ノートル＝ダム＝デ＝ポルトのバルドン祭》1894年頃

60点が出品されますが、ここではそのうちの2作品をご紹介します。

「ブルターニュ」「カンペール」って、どんなところでしょうか。
フランスの北西部に位置する、ブルターニュ地方。もう一つのフランスといわれる、フランスの中でも特異な文化を持つ個性豊かな地域です。その英仏海峡と大西洋に突き出た半島の最西端、フィニステール県(地の果ての意)に、カンペールがあります。5世紀にイギリスからブルターニュへと渡ったケルト人が最初に築いたのがこのカンペールの街でした。

1872年、カンペールの街の中心部に設立されたカンペール美術館は、ルネサンスからロココにいたる巨匠の作品も収蔵していますが、とりわけ注目されるのはこの地方の自然や風俗などを描いた「ブルターニュ絵画」です。本展では、変化に富んだ風景や独特な文化など、個性豊かなこの地方の風土に魅了された画家たちが描き出した「ブルターニュ絵画」約



リュジャン・レヴィ＝デュルメル《ペンマルクの聖母》1896年

最初は、聖母子のこちらをまつすぐに見つめているまなざしが印象的な《ペンマルクの聖母》です。描いたのは、ラファエル・コランの弟子でもあったリュジャン・レヴィ＝デュルメルです。極めて細密な描写には、アカデミックな表現と共に、陶器の絵付師でもあった彼の絵付技法の名残が見られます。本作は彼がブルターニュ地方のペンマルクを訪れ、その地の風景と住人の敬謙さに接することによって生まれた作品です。この地方伝統の衣装をまとった聖母子はこの地の自然をバックに描かれており、まるでペマルクの住人であるかのような印象を抱かせます。顔の周りで輝く光背とキリストの祝福の身振りが、これが神聖な場面を描いたものであることを思い出させてくれます。



「山上紀代」
意外に、ブルターニュ、身近ですよ。

「フランス・カンペール美術館所蔵ブルターニュの空と海展」 誌上ギャラリートーク



みなさん、高松市美術館友の会をご存知ですか？ 会員になると美術館主催の特別展を各1回無料で、また常設展は何度でも無料で鑑賞していただけます。年会費は一般3,000円、高校以上の学生2,000円(他にもファミリー会員、特別会員(法人)有り)。年6回程度ある特別展を4回行けば元がとれるお得さ！ さらに図録購入の割引特典や美術鑑賞旅行など魅力がいっぱい！。現在今年度の会員募集中。詳しくは美術館まで。

〔鈴木典子〕

突撃アートの晩ごはん 2

美味しそうな(?)美術作品を捜し出し、勝手に味見したり感想を述べる「突撃アートの晩ごはん」。
2回目のメニューは、高橋由一(1828~94)の《鮭》を取り上げました。



高橋由一《鮭》
1877(明治10)年頃
油彩・紙 東京藝術大学所蔵

でも、この絵が美味しそうって言うのかしら?「食べたい」というよりも「見てるだけで十分」でしょうか?いや本当に見ていたい、むしろいつまで見ても飽きない絵だと思ってしまう。

パカッと開けられた口、曲がった鼻、大きく切り取られた身とのぞく骨、シワの寄ったフヨフヨした皮、光沢のある鱗。その全ての部位から鮭のヌメとした生々しい感触が伝わってきます。また吊るした荒縄には鮭のズシリとした重みがかかっている緊張感が出ています。こういう題材でここまで描けるものなんだと驚かされます。写実的、リアル…そんなありふれた表現で、言い表せない鮭の存在感。皆さんも「鮭って、こんな魚だったのか」と改めて教えられるのではないのでしょうか。

でも当時の人も驚いたでしょうね。このような絵が発表されたら…:実は由一と弟子たちは鮭を好んで題材にしていました。由一の作品と伝えられる鮭の絵は何枚も残っていて、

真偽のほどが現在も研究されています。その中でも秀作と言われているのが、この芸大の《鮭》です。彼の弟子によると、「由一は無垢では面白くないので肉の部分をわざと切って描いた」のだそうです。それで迫真の絵が完成したんですね。日常生活の何気ないものを美しいと思ひ、その美を追求した由一の独特の感性と目の付け所、こだわりには感服させられます。

この《鮭》を初めとして、由一は静物画を二つのジャンルとして確立し、「明治の近代洋画の最初の人」と位置付けられています。ただ実際に油絵を描き始めたのが40歳を過ぎてと遅かったため、世に認められるのにも時間がかかりました。その売れない時代に彼を援助したのが、何とこんぴらさん(金刀比羅宮)の宮司さん!そこで金刀比羅宮は日本でも有数の由一のコレクションで知られています。鯛や鱈、なまり節などをえがいたものも学芸館に収蔵されています。でもこちらは改修のため、しばらくはお目にかかれなそうです。あしからず。

【前田圭見】

■デュフィ展ギャラリートークを終えて[11.3~12.9]



色彩の魔術師とも、線描の天才とも言われるフランスの画家、ラウル・デュフィ。大好きな作家ということもあり、資料調べの段階から楽しく取り組む事のできたギャラリートークでした。

基本的に、civiの担当するギャラリートークは日曜・祝日の1日2回ということになっていますが、今回は日本人の好きな作家と言われるデュフィの展覧会だけあって、平日も各地の美術館友の会などの団体客の来訪が

多く、いくつかの団体客に対して、都合のつくciviのメンバーが交替でギャラリートークを務めました。遠くは北海道の釧路から、また広島から、近くは町内の老人会など…。大変熱心なたくさんの鑑賞者と出会うことができました。

あるグループのお一人は、私の問いかけに対して本展の感想を長々と話されました。ほんの一言二言のお返事を期待していた私は、ちょっと驚きましたが、話に引き込まれ感心して聞いてしまいました。考えてみれば、熱心な鑑賞者であればあるほど、好きな作家あるいは好きな絵について一言言っておられるはずですから、この方に限らず話したくうずうずしている方は多いと思われまます。

こうした鑑賞者を前にギャラリー

主な活動

2001年

- 11・1 しびの一と(高松市美術館ボランティア通信)第4号発行
- 11・3~12・9 デュフィ展ギャラリートーク
- 11・18 香川県歴史博物館ボランティアと交流会
- 12・1 香川県文化会館ボランティアwithと交流会

2002年

- 1・12 版画ワークショップ
講師:下村宏(版画家・美術館実技講座講師)
- 3・1~3・31 クールベ展ギャラリートーク

トークする私たちにとって、よりよいトークとは?耳を澄ませば音楽が聞こえてくるような、鮮やかに心地よい作品が多数展示されたデュフィ展で、また新たな課題を手に入れました。[石原ミエ子]



面持ちでした。今回のワークショップを通し、版画の技法に関する理解は以前に比べるかに深まりましたし、また版画作家にとって、優秀なプリンターとの出会いがいかに大切であるかという新たな発見もありました。今後のギャラリートークに生かしていきたいと思ひます。[石原ミエ子]

■版画ワークショップ開催[1.12]

レンブラント版画展や池田満寿夫展のギャラリートークの際、版画の技法説明の必要が生じる場合があり、そのつど技法のマニュアルを読んで対応してきましたが、実技経験無しに説明するのも心もとなく、civiの多くが体験学習を希望した事から今回のワークショップが実現しました。幸い美術館には版画教室があり、その講師である下村宏先生からご指導いただける事になりました。当初私たちは一日で全て

の技法をマスターしたいという欲張った希望を持っていましたが、それは無理とのことで、結局エッチング、アクアチント、ドライポイントを実技で行ない、それ以外の技法(メゾチント、リトグラフ、シルクスクリン等)については実作を見本に詳しく説明をしていただきました。

下村先生は「時間が無い、時間が無い」と言いながらも、合間に冗談を繰り返して教室をわかせ、お陰で私たちは初体験の緊張から解放さ

れました。また「初めての作品はなぜか良いのが出来るんですよ。皆感動しますよ。」などといわれ、ウキウキと胸を弾ませながらの作業開始となりました。ところが実際の作業では、理料の実験を思わせるような薬品の使用があったり、版が上手く出来ても、刷るのが難しく何度も失敗を重ねたりと、思ひのほか大変でしたが、先生の言葉どおり、みな初回作とは思えない立派な作品が出来上がり、本当に全員感動の

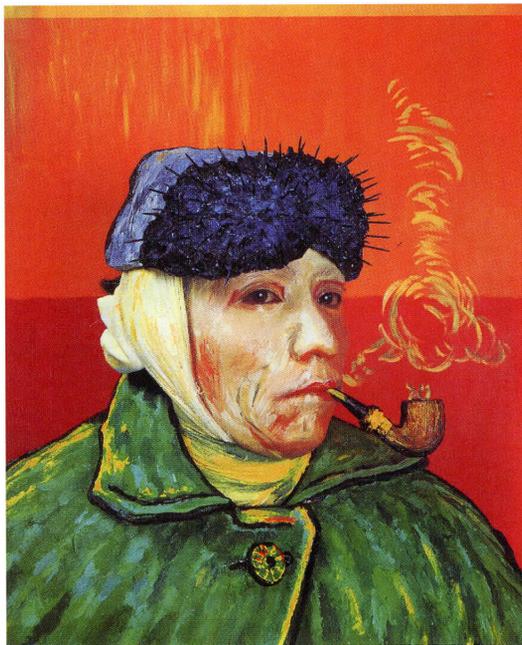


版画ワークショップ参加者による作品。

高松市美術館コレクション

森村泰昌《肖像(ヴァン・ゴッホ)》

1985年/カラー写真プリント/120×100cm 高松市美術館蔵



ゴッホが画家仲間ゴーギャンとの喧嘩で逆上し、自分の耳を切った直後に描いた《包帯をしてパイプをくわえた自画像》。本作はこの名画とくりかたつたのですが、作中の人物は見ているはずの私たちを逆に見つめ返しているようで、どこか妙な感じがします。

よく見ると目だけが大変生き生き!人間の目!?

その通り!実はこの作品、作者の森村泰昌が自らゴッホに扮装し、それを写真に撮ったものなのです。

森村はある時、ゴッホのこの自画像を見て、「あつ、自分の顔に似ている」と直感したと言います。この単純な思いが作品を作る原動力となりました。そして、作者はゴッ

できず、生身の作者自身の「目」が露わになっています。この事によって、「虚像」と「実像」が交錯する奇妙なイメージが画面の中に作り出されているのです。

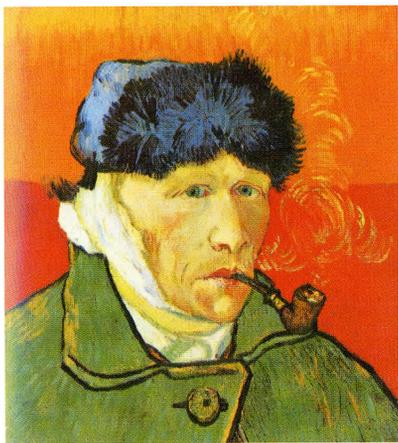
ところで、森村は90年代以降、名画の中に自らの姿を忍び込ませる作品に加え、映画やテレビでおなじみの女優に成ります。「女優シリーズ」を制作しています。一見それらは私たちが憧れた女優のメイクやファッションを真似たり、好きな歌手の歌真似をするのと近いことのようにも思われます。

しかし、森村の作品づくりは単なる「モノマネ」ではありません。そのことは作者の次の言葉からも明らかです。「単に入れ替わるだけではなく、自分なりの着こなしをするのが大事」その着こなしが美術作品や美術史、芸術論への私の批評行為になっているのかも。

「名画」や「女優」を独自の「着こなし」で服のように身にまとい、あつと驚く世界を作り出す森村泰昌の作品。手強そうな「名画」や「女優」を相手にするのですから、その「着こなし」の技術は相当なものなのでしょうね。

本作は2002年度第1期常設展「引用の美術—80年代以降の作家たち(4/6—6/6—9)」に出品されています。

〔鈴木典子〕



ファン・ゴッホ《包帯をしてパイプをくわえた自画像》1889年 個人蔵

子どものためのギャラリーツアー



「デュファイ展」には、たくさんの子もたちが見に来てくれた。ある保育所の年長さんら蔵原が遠足の傍ら、また盲学校の高校生が授業の一環として立体コピーを持参して、そして城内中学校1年生は事前勉強の後に、実際のデュファイ作品に会いに来てくれた。(みんな、ありがとう!)その時々、ギャラリーツアーに立ち、彼らと作品鑑賞を共にしたのだが、今回はこの展覧会で初めて試みた子どもためのギャラリーツアーに挑んでみた。

この後、5、6点の作品を一緒に丁寧に見ていった。自分たちの目、作品の中に発見したこと、感じたことを口にしていく子どもたちは楽しそうだった。ただ、年齢の幅が大きい分、問いかけの言葉の取捨選択が難しく、高学年以上というように対象を絞っている方が良かったように感じても、また、学校とは違い、子どもたちとは単発的な出会いであつて、その後のフォローが出来ない点からも、もっと小人数体制で行うべきであつたかもしれない。わずか90分の時間であつたが、子どもたちの作品との係わり方が積極的になる瞬間が度々あり、私の方が目を見張る体験をさせてもらった。

〔毛利直子〕

「デュファイ展」には、たくさんの子もたちが見に来てくれた。ある保育所の年長さんら蔵原が遠足の傍ら、また盲学校の高校生が授業の一環として立体コピーを持参して、そして城内中学校1年生は事前勉強の後に、実際のデュファイ作品に会いに来てくれた。(みんな、ありがとう!)その時々、ギャラリーツアーに立ち、彼らと作品鑑賞を共にしたのだが、今回はこの展覧会で初めて試みた子どもためのギャラリーツアーに挑んでみた。

これは、小学生15名を対象に募集し、「デュファイ展」開催中の第2土曜日、午前10時から90分間、美術館を探検するというものだった。事前に私の方からリクエストしていた「自分で描いた絵」を持った子どもたちが、講座室に集合した。学校も学年も違う子どもたちは、当然学年もさよそしい。まずは関係作りから始まった。自分の「絵」を説明してもらいながら、その子その子の持っている「絵」の特徴を見つけてやる取りの中、彼らとは打ち解けていく。この絵をじっくり見る作業は、持ち寄られた作品がバラエ

ティに富んでいたお陰で、想像した以上の効果があつたようだ。素材として、油絵の具で描かれたもの、輪郭線を持たないカラフルな水彩画、骨太なペン画、また主題として絵本を真似て描いたファンタジー、写実風の花の静物、友人を描いた人物など、ジャンルの説明を二々加えなくとも、絵を描くという行為の表れが各自違つていることを、子どもたちは漠然と体得することができたと思う。これはデュファイ芸術を見るためのウォーミングアップとなつた。子どもたちは移動となると俄然元気が出てきた。展覧会場入口から、少しだけ作品が展示されている様子を覗いてもらう。そして、「作品になった気持ち」の彼らも、美術館外の搬入庫に連れ出した。「ものすごく大きなトラックで高松に到着した作品たちは、このシャッターが入つて来たんだよ。」と、ひんやりとした広い荷置きスペースに引き入れると、舞台裏に好奇心満々ではしゃぎ出す。「さあここから2階の展示室までエレベーターに乗るよ。」と3トーンで積載できる作品運搬用の大型エレベーターに乗り込む。大きくて無機質なエレベーター内で子どもたちは少し緊張気味。でもすぐに「このエレベーター、動いてないみたい!」との声が聞こえてくる。「なぜだと思つた?」「作品にゆれを与えないため、かな。」「それとおり!さすが小学生!」さて、暗い舞台裏を通り抜けると華やかな展覧会場に出るのだが、その前に作品がバッキングされていた木箱に触つてもらった。子ども力ではびくともしない木箱は、それだけでも多くを物語っている。その上で「展示され



作品用のエレベーターにものれたよ!

